

# 1. 精神科病院における高齢患者への行動制限に関する看護師のジレンマ

○山岡八千代（姫路大学看護学部），藤野文代（横浜創英大学看護学部）

## I. はじめに

現在の精神科病院における問題には、認知症患者の急速な増加及び入院期間の長期化、精神疾患患者の高齢化に伴った精神・身体合併症患者の増加などが挙げられる。このような問題により精神科病院において、行動制限を行わざるを得ない状況が増加すると懸念される。しかし行動制限は法的にも倫理的にも縮小の方向である。精神科看護師は、高齢患者の治療・看護・安全のため行動制限を行わざるを得ないが、その反面高齢患者のために行動制限の縮小を行いたいといったジレンマがあると考えられる。本研究では、精神科病院における看護師の高齢患者への行動制限に関するジレンマの内容を明らかにすることを目的とした。

## II. 研究方法

1. 研究デザイン：質的帰納的研究
2. 研究対象者：本研究に同意を得た A 精神科病院に勤務する看護師 7 名
3. 研究期間：平成 27 年 3 月～7 月
4. データ収集方法：研究協力の得られた A 精神科病院の看護部長に研究対象者に該当する看護師を紹介してもらい、インタビューガイドを用いて半構成面接法で行った。
5. データ分析方法：録音内容から逐語録を作成し、高齢患者への行動制限についてのジレンマに関する記述をデータとして抽出し、コード化、サブカテゴリ化、カテゴリ化を行った。全過程において複数の研究家で検討し、真実性・妥当性の確保に努めた。
6. 倫理的配慮：関西福祉大学看護学部倫理審査委員会の承認を得て、本研究を実施した。

## III. 結果

精神科病院における高齢患者への行動制限に関するジレンマでは、1 次コード 100, 2 次コード 42 があった。それにより『行動制限を受ける患者の苦痛を感じる』『行動制限を行う看護師の苦痛』『行動制限が必要な高齢患者には寄り添う看護がしたい』『行動制限の縮小について意見が言えない』『高齢患者の治療・看護・安全のため行動制限は必要である』『転倒予防のため車椅子ベルトは必要である』『行動制限の縮小による後悔』の 7 のサブカテゴリがあり、【患者の苦痛を感じ、行動制限はしたくない】【行動制限は患者のために必要である】の 2 のカテゴリに集約された。看護師は、行動制限により看護の倫理原則である自律尊重の原則に反しているが善行と無害の原則には応じているというように倫理的対立があり、ジレンマを起こしていると考えられる。

## IV. 結論

本研究で得られた 7 のサブカテゴリ、2 のカテゴリにより精神科看護師は、高齢患者の苦痛を感じ寄り添う看護がしたい反面、行動制限の縮小による転倒やチューブ類の抜去により後悔をしており、高齢患者の治療・看護・安全のため行動制限は必要と感じているように、相反するジレンマを抱いていたことが明らかになった。